

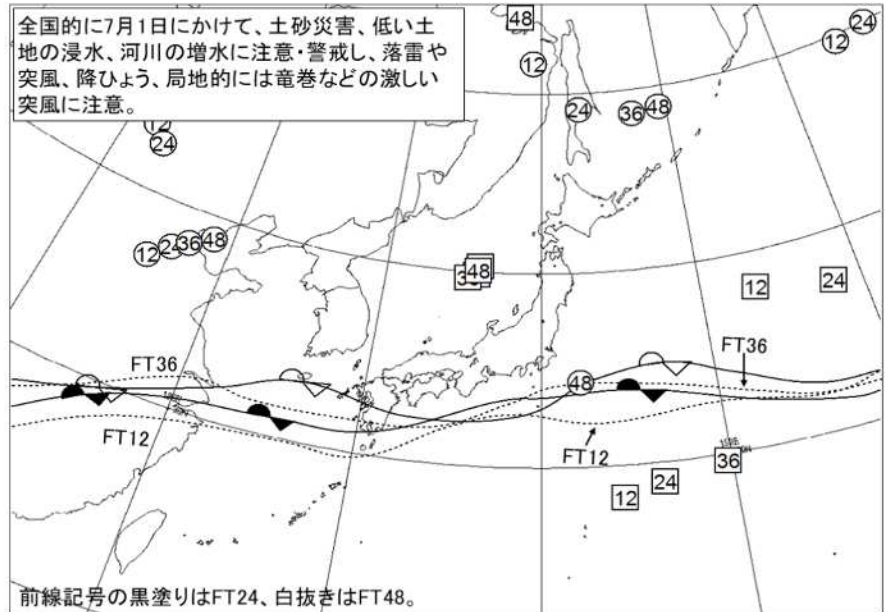
1. 実況上の着目点

① 500hPa 5820～5880mの強風軸対応の前線が、東シナ海～種子島・屋久島付近～伊豆諸島の南へのびている。四国の南では、上空トラフの存在を示唆する衛星水蒸気画像の暗域が東進。東シナ海～西日本の南は大気の状態が非常に不安定となって対流雲が発達し、雷を多数検知。猛烈な雨を解析。

② 500hPa 5640m付近のトラフが北海道地方を南東進し、雷を検知。29日09時の稚内の高層観測では、500hPa -19.9℃を観測。

③ 上空に寒気を伴う浅いトラフ

フが日本海を東進。西～北日本には、相対的な下層暖湿気が残っており、局地的に強い雨を解析。



主要じょう乱解説図

2. 主要じょう乱の予想根拠と防災事項を含む解説上の留意点

① 1項①の前線は7月1日にかけて、太平洋高気圧の西への張り出しに伴って九州や伊豆諸島付近をゆっくり北上する。また、30～1日は、500hPa 5760m付近のトラフが深まりながら華北から中国東北区に進む。その南側の500hPa 5820～5880mでは上層の浅いトラフに対応して正渦度移流が断続的に強まり、地上の前線上に波動が形成されて周辺の大気活動も断続的に強まる。これらの影響で大気の状態が非常に不安定となり、雷を伴い激しい雨や非常に激しい雨が降り、大雨となる地域は次第に東に広がる。南西諸島では1日にかけて、伊豆諸島では30日にかけて、九州では1日は、土砂災害に注意・警戒し、低い土地の浸水、河川の増水、落雷、突風、局地的には竜巻などの激しい突風に注意。

② 29日は、1項②の寒気を伴うトラフが北海道付近を通過し、30～1日は、500hPa 5520m付近で-24℃以下の寒気を伴う寒冷渦がオホーツク海を南下して千島近海に進む。一方、西～北日本は、1項③の下層暖湿気が残る中で、2項①の上層の浅いトラフに伴い500hPa -6℃以下の寒気が流入する。下層暖湿気や上層寒気、日中の気温上昇の影響が加わって、大気の状態が非常に不安定となり、激しい雨が降り大雨となる所がある。西日本では30日にかけて、東～北日本では1日にかけて、土砂災害、低い土地の浸水、河川の増水に注意し、東日本では注意・警戒。また、落雷や突風、降ひょう、局地的には竜巻などの激しい突風に注意。

3. 数値予報資料解釈上の留意点 総観場はGSMを基本、量的予想や降水分布はMSMやLFMも参考。2項

①の前線及び前線上の波動の位置は、不確かさが大きいことに留意。

4. 防災関連事項 [量的予報等]

① 雨量(18時から24時間)：九州南部120、奄美100mm。

② 波浪(明日まで)：高い所(3m以上)はない。

5. 全般気象解説情報発表の有無 発表の予定はない。